

## 7. 1-オレオイル-2, 3-ジアセチルグリセロール基質を用いたドライケムストリーによる血清中リパーゼ活性測定法の検討

(臨床中央検査部)

○高橋 寿実・和田 晴美・星川 喜江  
萩 三男・清水喜八郎

ヒト腭リパーゼは生理的にはトリグリセライドの $\alpha$ 位脂肪酸エステル加水分解をする酵素であり、その水解特異性は広く長鎖脂肪酸エステルも水解する酵素である。したがって、リパーゼ活性の測定法は基質の選択によりヒト腭リパーゼに対する活性特異性や正確性および精度などに問題があった。また、測定方法においても比濁法、比色法等多くの方法があるが簡便で測定精度の良い方法がないのが現状である。

今回我々は以上の問題点を回避することのできるdry reagent chemistryを応用した1-オレオイル-2, 3-ジアセチルグリセロール基質を用いた血清中リパーゼ活性の測定について基礎的検討を行った結果、良好な結果を得たので報告する。

## 8. 当科で実施している顎関節腔二重造影法の実際

(歯科・口腔外科)

○水野 博之・竹内 徹・高橋 達夫  
阿部 廣幸・扇内 秀樹

顎関節疾患の中で臨床的に最も多く遭遇する疾患に顎関節症があり、これは開口障害、関節雑音、疼痛を主症状とする非炎症性疾患であるといわれている。近年、この顎関節症の中に顎関節部軟組織の障害、ことに関節円板の位置および形態異常を示す顎関節内障害が少なくないことが明らかにされ、その原因や病態に関する報告が、欧米ばかりでなく、本邦においてもしばしばみられるようになった。

このような顎関節部軟組織の障害の診断に際しては、単純X線撮影と共に顎関節造影法が必要であり、当科においては特に顎関節腔二重造影法を用いている。これは、顎関節腔内に造影剤を注入し、後にこれを吸引し、陰性造影剤として空気を関節腔内に満たし、撮影を行うものである。こうすることにより、上下顎関節腔内壁および関節円

板表面に付着した造影剤のみが写し出され、関節円板の輪郭が明確となり、よって関節円板の位置、形態そして周囲組織の状態の観察が可能となる。

## 9. 口腔内白板症およびその類症—3例について—

(皮膚科)

○池田美智子・前口 瑞恵・菊池 りか  
川島 真・肥田野 信

(口腔外科) 安藤 智博

症例1: 71歳, 男, 初診の約2カ月前より舌に白色病変出現。組織学的に舌白板症と診断し、CO<sub>2</sub>レーザー療法を2回施行するも一部再発あり。症例2: 63歳, 女, 初診の約半年前より舌に白色調線状の表面顆粒状の皮疹出現。近医にて口腔内カンジダ症の診断で抗真菌剤の含嗽を行うも拡大し、当科受診。舌白板症と診断し、CO<sub>2</sub>レーザー療法、現在経過観察中。症例3: 68歳, 男, 約4年前より、右下口唇に白色調扁平な皮疹を生じ、その半年後両頬粘膜にも同様皮疹出現。某医で生検を受け、カンジダ症の疑いのもとに抗真菌剤の外用を受けるも、右下口唇と右頬粘膜の皮疹は拡大、隆起してきた。生検にて、右下口唇はoral florid papillomatosis、右頬粘膜は、有棘細胞癌と診断。右下口唇と左頬粘膜に対してはCO<sub>2</sub>レーザー、右頬粘膜には放射線療法およびプレオマイシン持続皮下注を施行。症例1, 2では、乳頭腫ウイルス抗原の存在が免疫組織化学的に証明された。

## 10. 物理的尋麻疹の1例

(小児科)

○猪野 雅孝・平野 幸子・三石 洋一  
泉 達郎・福山 幸夫

9歳女児、全身性尋麻疹と嘔声、呼吸困難を主訴に来院。3歳時より、冬期寒冷時の運動にて尋麻疹を認め、6歳頃より症状の増悪がみられ、全身性の尋麻疹が冬期以外でも、軽度の運動にても出現し、さらに、嘔声や呼吸困難、悪心、嘔吐を認めるようになった。9歳時より、上記症状が階段昇降や氷水にても誘発されるため、入院精査した。

血液一般、血清化学、尿一般、免疫グロブリン、補体系は正常、運動負荷試験および寒冷負荷試験